

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

全問マーク式

分量・難易（前年比較）

分量（減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加）難易（易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化）

出題の特徴

・読解総合4題の総語数は2,000前後であることが多かったが、2020年度は1,555と極端に少なく、（その反動なのか）2021年度は2,770と大幅に増加した。2022年度は長年出題されてきた会話文問題（大問Ⅴ）がなくなり、読解総合4題のみの構成（総語数は3,445）となり、分量だけでなく設問形式にも大きな変更があった。さらに2023年度は読解総合3題の構成（総語数は過去最多の3,551）となるなど、出題形式の変更がつついている。

・2020年度までは長文1題あたり500語程度（読解総合4題で2,000語程度が目安）だったが、2022年度の大問ⅡとⅢは1,000語を超える長文が出題され、2023年度の大問Ⅱは1,700語を超える（本文だけで3ページ以上の）超長文であった。

・大問の配列については「(英文レベルの) 易から難へ」というケースが多かったが、2022年度の大問Ⅰは本文や設問の難度がこれまでの教育学部の過去問よりもかなり高いものであった。2023年度の大問Ⅰも難度は高く、最後の大問Ⅲがいちばん解きやすかったと思われる。

・大問ごとの設問数が10で統一されていた（かつては大問5題で50問、50点満点）ことも教育学部の特徴であったが、2023年度は大問ごとの設問数のバラツキが目立つ（大問Ⅰは11、大問Ⅱは16、大問Ⅲは5）。

その他トピックス

・2022年度の大問Ⅳは「同じテーマの2つのパッセージを読み比べる」という新たな形式で、「パッセージ1と2の関係」を問うもの（設問6）などの新傾向問題が出題されたが、こうした形式での出題は1年限りで姿を消した。

・設問は空所補充や内容説明・内容一致が頻出だったが、2022年度の大問Ⅰでは、「第1パラグラフ（導入）→第2パラグラフ（補強）」といった論の展開を問うもの（設問1）、「筆者がどのような視点から書いているか」を推論させるもの（設問9）、「筆者が支持すると思われる調査として適切でない例」を選ぶもの（設問10）など、新しいタイプの内容把握型の設問が目立った。2023年度は設問形式そのものの目新しさはそれほどなく、全体として従来の設問形式にもどっているように思われる。

・2022年度の大問Ⅰにつづき、2023年度でも大問Ⅱでダーウィンに関連する英文が出題されている。

＜大問分析＞

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
I	読解総合	「歴史家による、過去の再評価に基づく歴史の書き換え」 (945 words)	内容一致（「推論」を含む）、語義選択（「置き換えられない」ものを選ぶものを含む）、空所補充（「連立型」を含む）。 パラグラフに対応した設問のほか、文章全体の内容に関するものなど、本文の内容を的確に把握できているかを問うものが目立つ。	やや難
II	読解総合	「表情と感情の関係についてのダーウィンの見解の誤り」 (1,756 words)	下線部意味選択（「置き換えられない」ものを選ぶものを含む）、内容不一致、内容説明、空所補充（「連立型」を含む）、内容一致（「推論」を含む）、語句整序、タイトル選択。 英文量が多いので、設問を解くことに重きをおいて、メリハリをつけて読む必要がある。設問は多岐にわたっているが、これまでも出題されたことのある形式のものが多く、設問自体のレベルは標準といえる。	標準
III	読解総合	「学習中のマルチタスクが引き起こす否定的な結果に関する研究報告」 (850 words)	内容一致文完成（「パラグラフの要点」を含む）、空所補充、タイトル選択。 文章の内容はわかりやすい。本文の分量に対して設問数が少ないので、本文と設問を照らし合わせながら効率よく読み進めていくのが得策である。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

2022年度につづいて、2023年度も大問構成や出題形式に変化があったが、記述されている情報を整理しながら内容を的確に読み取る能力が要求されていることに変わりはない。もともと教育学部の設問形式は多岐にわたりバラエティに富んでいるので、過去問を解くことで設問の形式に慣れておくといよい。2021年度以降、英文のワード数が大幅に増え、難度の高い語彙も含まれているので、様々なジャンルの（難度がやや高め）英文を読み慣れておく必要がある。設問によって難度の差もあるので、確実に得点にできる設問を取りこぼすことのないようにしたい。実際の試験の場面では、まず全体の大問構成を確認して、英文内容（テーマ）や設問形式などを考慮して、大問をどのような順番で解いていくか、時間配分はどのようにするかといったことも、90分の試験時間でこの分量の問題を処理していくうえでは重要なポイントになるだろう。